



地域の記憶を未来へ継承

宇都宮市中心部の釜川沿いで100年以上親しまれてきたおでん屋「のんき」の建物を、官民連携により**文化交流拠点へ再生**しました。昭和50年代の庇、建具、腰壁、タイル、照明、カウンター等を極力残し、新設部にもラワン材や緑甲板を用いて**新旧の境界をなじませています**。釜川、御橋、ふれあい広場、宇都宮城土塁跡の大谷石擁壁との関係を読み解き、内部路地、大きな開口、吹抜けを介して、**建物内の活動と周辺景観をつなぎました**。1階の本屋、フレンチレストラン、焼き菓子店、2階の活動拠点、イベントスペース、アーティスト・イン・レジデンスには、多様な人と表現が集う。全体で120人を受け入れるシェア型書店の担い手が建物に関わり、窓から漏れる光や広場と連動した活動が、**釜川沿いに新しい日常の風景を生み出しています**。解体・駐車場化されかけた身近な建築を、過去の姿に固定せず、**地域の記憶と新たな営みが重なる場として未来へ継承する**試みです。

建築主（一般社団法人釜川から育む会）

私たちは、**釜川周辺に点在する建物や公共空間をつなぎ、人や活動が循環するエリアを少しずつ育ててきました**。「のんき」も単体の建物としてではなく、その拠点形成の一つとして考えています。特に重視したのは、**ふれあい広場**を中心に、オリオン通りから釜川へ人を導く入口を、近接する小さな本屋「KMGW BOOKS」と一体となつてつくることでした。完成後、かつてのおでん屋「のんき」を知る多くの方が訪れ、「カウンターが残っている」「懐かしい中に新しさもあって素敵」と喜んでくださったことは、想像以上の反応でした。また、アートプロジェクトや生物多様性に関する活動と結びつき、**地域の記憶を蓄積するアーカイブや、釜川の生きものを伝える地域水族館**としても機能し始めています。建物を残すことが、過去を保存するだけでなく、**次の活動や関係を生み出すことにつながっている**と実感しています。

設計者（ビルトザリガニまちづくり合同会社+アンテロープー級建築士事務所+佐原建築設計室）

設計で大切にしたのは、建物に積み重なった**時間**、釜川や広場など周辺の**環境**、そこに関わる**人や活動**を切り分けず、**一つの空間としてつなぐ**ことでした。既存建物や周辺の状態を一つひとつ読み取りながら、残すもの、手を加えるもの、新しくつくるものを判断し、**新旧の境界が自然に溶け合う**よう素材や納まりを調整しています。特に、**2階の既存の量を切り取って設けた吹抜け**は、宇都宮城土塁跡の大谷石擁壁へ光を落とすとともに、1階のシェア型書店と2階のスタジオを視覚的・空間的につないでいます。また、釜川周辺の界限性に寄与する多くの路地に倣い、**通りと奥まった書店をつなぐ内部路地**を計画し、既存の建具や腰壁、解体によって現れた構造や庇の跡、新設したパーティションなど、**異なる時代の要素が共存**するよう構成しました。古いものを保存するだけでなく、**新たな環境やつながりを生み出しながら次の世代へ継承していく**ことが、この建築の特徴だと考えています。

施工者（株式会社ZERObASE）

100年以上にわたり地域の皆様に親しまれてきた「のんき」という建物を、**単に新しく造り替えるのではなく、その歴史や記憶を大切にしながら、次の世代へつないでいく**。その思いを共有しながら、建築家、地域の皆様、そして関係者の皆様と一緒に、この場所の新しい姿をつくり上げることができました。施工においても、既存建物を持つ魅力をできる限り残しながら、**新たな用途に対応するための改修**を行うなど、**既存の価値と新しい機能をどのように両立させるか**を大切にしました。工事を進める中では、歴史ある建物ならではの難しさもありましたが、関係者の皆様と一つひとつ課題を乗り越え、地域に再び人が集まり、文化や表現が生まれる場所として生まれ変わったことを、施工者として大変誇りに感じています。これからも、建物を「造る」だけでなく、**地域の歴史や人の思いを次の世代へつなぐ仕事**を大切にしていきたいと思っています。

